

白川静のことば

《14》



金子都美絵・画

神話的な世界観のなかでは、鳥獣はみな精霊であり、精霊の化身であった。鳥の飛びかうさまや獣のたたずまいにも、何らかの啓示的な意味が含まれている。　　〔中略〕　　文字は現象を現象的に写すのでなく、現象の示す意味を形象化するところに成立した。

〔中略〕

奪は手にもつ雀を失う意であるとされる。しかし鳥を手にもつことは、普通にはないことである。金文の字形によると、それは衣の中に雀がかかっている。この衣はおそらく卒衣、死者の経帷子の類であろう。哀・衰・冨・襄・襄などの死喪の礼は、すべてその衣襟に呪器などを加える字形である。それならば衣襟から雀が奪去するのは、その霊が鳥形となって肉体を離れ飛翔することを示す字でなければならぬ。

〔中略〕

鳥となって奪去した祖霊は、季節を定めて故郷の水辺にもどる。群をなして時処をたがえずにかえりくる渡り鳥の姿を、人びとは祖霊の化身と信じたであろう。そこに宮廟をたて、水をめぐらして聖所とした。